

基本的には、この種の「臨床のこころ」とは、常に相手と「ともにあろう」とする思いであり、それは、今自分のかかわる人を冷たく対象化することなく、臨床家自身、必然的に自己自身と対決することを余儀なくさせる過程であるといってもよい。請われて寄稿した、昨年10月刊行になる<臨床看護>11巻11号所載の、「カウンセリングにおける対決—カウンセリングへの人間学的・実存アプローチ」なる論稿の中に、その意義と本質についてくわしく考案したところでもある。

4) 今年度もひきつづき、大学院研究科の演習で「人間性心理学への道」をとりあげている。昨年もこの欄で若干ふれたが、昭和59年私どもが主催校として担当した、日本人間性心理学会第3回大会における公開シンポジウム、「現象学からの提言」の公刊は、関係各位の格別の御協力を得て、演習題目と同じ「人間性心理学への道」として、本年8月誠信書房から出版する運びに到った。こうした志向性に立つ心理学への、いささかなりとも寄与となり得ることを期待してやまない。

5) 心身障害児と取り組んでの実践活動は、今年度また、新しく参加することになった重度の障害児に対し、新しい療育者がさらに若干加わることによって発足し、療育を積み重ねてきている。

昨年度のまとめとしては、今回本紀要にも掲載されている、「健常児きょうだいと家族力動」が検討された。これはまた、本年5月11日開かれた、第35回東海心理学会において、共同研究者、後藤由美子・板倉由未子の両名が同じ題目で、その一部を報告している。次子出産という状況の中で、それぞれの家族が、新しい生命の誕生を真摯に迎える構えが、そこには披瀝されている。ちょうどほとんど同じ時期、6才という若い生命を不慮の病

いで絶った、療育グループOB、辻貴文君の、障害重いながら懸命に1週間がんばりつづけた闘病の床に、終始交替してつきそった療育者各位が、全員受けとめた感動にそれはつながるものであって、まさしく人間が生きるということ、死ぬるということ、その尊厳への讃歌であるといってもよい。

名古屋早期療育指導委員会としては、こうした障害幼児に対する対応のあり方について、この年間もひきつづいて検討を重ねてきたが、昨年夏以降、特に小委員会を設け、「障害児総合通園センター」の機能の充実をめざし、「地域療育センター」の拡充をはかるべき方向に即しての、「第2次報告—障害乳幼児に対する早期対策について」をとりまとめ、この3月、西尾名古屋市長に提言した。これら施策が実り多く、一段と具現化することを、その会の委員長として期待する所以である。

6) 昭和60年度厚生補導特別企画による第19回全国学生相談研究会議は、本年1月16日から18日まで、雪に洗われた山形厚生年金休暇センターで行われた。この年も、「私の青年期臨床」と題する佐治守夫氏の特別講演を司会し、また多くの感銘をうけた。毎度のことになるが、こうして私自身の日頃の学生相談実践の一里塚とすることができると喜ぶべき機会が得られたことを喜ぶたい。

7) 先ほど述べた今年5月の東海心理学会総会において、はからずも丸井文男愛知教育大学長のあとをうけて、東海心理学会委員長の任をひきつぐことになった。依田、近藤、大西、塩田、内山、丸井歴代委員長がふみ固めてこられた、当地域の心理学会のすぐれた伝統をうけつぎ、より発展せしめていくべく、微力ながら努力をつづけていきたいと考える。

(昭和61年8月14日)

## 研究経過報告—— '85年秋～ '86年夏——

小 嶋 秀 夫

初めに過去1年の内に現実化した新しい活動から、記してみたい。まず、アメリカの National Institute of Education からの依頼により、次のような最終報告書を作成した：The influence of Western philosophy and theories of psychology and education on contemporary educational theory and

practice in Japan (No. NIE-P85-3029). December, 1985. 128pp. これは自分の専門領域をこえた仕事であるが、小学校の後半に、ある実験校での新教育の洗礼を受けたという個人的な体験も関係して、引き受けたのである。

次に、これまでも少しこの欄で書いた人生段階図と

関連した新しい展開があった。1つは、かねて文通していたベルリン自由大学の歴史人口学者の Arthur Imhof 教授を招いて、本学部で講演や討論の会をもつとともに、京都ドイツ文化センターで開かれた「都市の歴史人口学」の研究会に参加したことである。これは、子育てについての歴史的な文献を読み、解釈する場合にも、1つの重要な基礎となると考えたからである。もう1つは、現在の人々が、人生の歩みをどのようにとらえ、表現するかを調べる方法の1つを開発しつつあることである。それは、描画と言語的記述、そして段階区分からなるものである。この方法を仮に描画によるライフ・コース研究(LCS-D)と名付け、広い年齢範囲の対象への適用を試みているが、結果の一部を日本心理学会第50回大会(名古屋、1986年10月)で、加藤教子とともに発表する、生涯発達心理学の研究に、何らかの寄与ができるものに行きたい。

第3に、国際基督教大学の源了圓教授を代表者とする3年計画の研究(通称「型」研究会)に参加して、活動を始めた。10名のメンバーのうち、心理学者は筆者を含めて2名であるが、異なった領域の、しかも関心を共有する内外の研究者との相互作用から得るところが多く、毎回の会合を楽しみにしている。

以下に従来からの研究で、いくらか進展したものを報告する。

〔児童発達観の研究〕これは歴史的研究と、現在の心理学的研究とに分かれるが、成果が現れたのは前者の方が主である。以前に予告した論文のうち、Stevensonほか(編)の本(Child development and education in Japan. New York: Freeman, 1986)の中の論文は、上記の両方の領域にまたがっているが、歴史の方にウエイトのかかったものである。また近世日本の児童発達についての概念の研究も歴史的なもので、この9月に出る International Journal of Behavioral Development に掲載される。そのほか、日本の児童

発達観に関する小さいエッセイが、詫摩(監)の本の中に出ている(ブレーン出版、1986)。以上の研究は、prescriptive なものであったが、それと関係づけつつ進めて行くべき descriptive な側面での歴史研究の1つが、この巻に載っている桑名・柏崎日記の分析である。この日記のこれまでの研究者の疑問点の多くが、翻刻者の澤下春男氏の下に届けられた渡部家(渡邊または渡邊)の系図の写しによって解消したことが、筆者の論文の記述にも影響を与えている。本巻のスペースをかなり多く取った論文ではあり、次巻でも同じ位の長さの論文となるが、それでも約200万字あると思われる両日記の内容を10万字で書くこととなり、別の形での出版も考えている。

〔家族関係など〕家族関係インヴェントリー(FRI)を小児医療の領域で試用してきたが、鈴木榮教授らと論文を書いた。その中でマニュアルは別に小嶋が書くこと明記されているので、宮川充司・内山伊知郎君とともに作成せざるを得なくなった。また本教室の村上隆氏による3相因子分析法を、夫婦のFRI得点に適用した結果などについては、日本教育心理学会第28回総会(1986年10月、福岡)で発表する。

また、ここ数年以上にわたって、筆者と関係者によって進められてきた乳幼児を含む社会的相互作用にかかわる諸研究をまとめて見ると、新しい仮説の設定が可能となったり、今後の研究の課題が浮び上がってくると思われ、そのまとめに共同で取りかかっている。

子どもをとりまく家族関係の理解という、市販誌への連載講座(小学校学級担任、1986,4-9月号)では、家庭・学校・地域の連携という視点を強調したつもりである。

そのほか、心理学の教科書(北尾と共編、有斐閣、1986)が出た。また、9月に出る予定の名古屋大学関係者による心理学の教科書(培風館)では、発達の章を担当した。

(1986年8月16日)

## 研究経過報告——昭和60年度

田 畑 治

### 1. カウンセリング過程の研究

この領域では2つの発表を行うことができた。いずれも中高年婦人の事例研究であった。1つは「心理療法に

おける動物のテーマの内的意義(I) —ある家庭内暴力の娘をもつ母親の心理面接を通して」(日本人間性心理学会第4回大会発表論文集、日本女子大学、50-51頁、